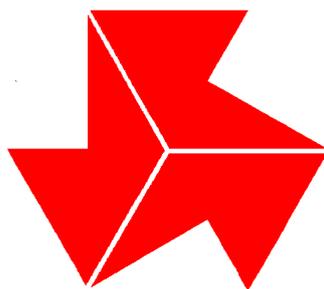


平成25年度
第7回石川県高等学校体育連盟研究大会

研 究 紀 要



主催 石 川 県 高 等 学 校 体 育 連 盟

あいさつ

石川県高等学校体育連盟

副会長 中嶋 敏一

石川県高等学校体育連盟研究紀要第6号の発刊にあたり、ご尽力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

さて、今年度は大分県を中心開催県とし、『未来をつなぐ北部九州総体』が盛大に開催されました。石川県勢も各種目で活躍し、今後の全国大会においてもさらなる飛躍を期待しております。2020年には、東京でオリンピックが開催されることが決定しました。一人でも多くの石川県出身者が東京オリンピックで活躍し、石川県さらには日本中に夢と感動と元気を与えてくれることを願っております。

また、全国研究大会は岐阜県で開催され、課題研究、各分科会で優秀な研究発表が行われました。課題研究において、『北信越かがやき総体』を終えての反省や課題について、調査研究委員会で発表する予定になっておりましたが、諸事情により辞退させていただくことになりました。

県内では、平成25年11月に第7回石川県高等学校体育連盟研究大会を青少年研修センターで開催しました。各専門部、各高等学校のご協力により、約100名の参加をいただき、4専門部（サッカー、自転車、ホッケー、レスリング）の発表が行われました。それぞれ内容の濃い発表で、他の専門部でも生かしていただければ幸いに思います。発表された専門部・先生方ありがとうございました。

最後に、平成27年度の全国研究大会は宮城県で開催され、競技力向上の分科会で石川県から発表することが決まっております。その準備を含め、今後益々石川県高等学校体育連盟研究大会が活性化するよう、関係各位にさらなるお願いをし、あいさつにかえさせていただきます。

平成25年度 第7回石川県高等学校体育連盟研究大会開催要項

- 1 目的 石川県高等学校体育連盟に加盟する各高等学校の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主催 石川県高等学校体育連盟
- 3 日時 平成25年11月26日（火） 14:00～16:00
- 4 会場 石川県青少年総合研修センター
金沢市常盤町212-1 TEL 076-252-0666
- 5 参加対象 石川県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
- 6 研究主題 「輝き・感動！ 無限に広がるスポーツの力」
～部活動で育む たくましい心と体～

7 内 容

研究発表

「石川県No.1を目指して」

～初心者競技力向上～

発表者 サッカー専門部
金沢伏見高等学校

山口 和人 教諭

「自転車競技」

～より速く走るために～

発表者 自転車専門部
内灘高等学校

守屋 英樹 教諭

「ホッケー競技の普及・発展」

発表者 ホッケー専門部
志賀高等学校

倉脇 寛支 教諭

「県レスリング協会のポテンシャル力」

～協会一丸となつての組織的取り組み～

発表者 レスリング専門部
野々市明倫高等学校

加藤 欣央 教諭

8 日 程

13:30	14:00~	14:10~	15:40~	15:55~
受付	開会式	研究質疑応答	指導助言	閉会式

1. はじめに

FIFA 女子ワールドカップドイツ（2011 年）優勝、ロンドン五輪（2012 年）準優勝により、女子サッカーの認知度は急激に上昇した。また、2020 年東京五輪が決定したことにより、これからのさらなる普及・育成・強化が期待される。

金沢伏見高校は女子サッカーが発足して 5 年目になるが、部員の 8 割近くが高校からサッカーを始める初心者である。今は、まだ競技人口が少なく、小学生の頃からトレーニングを積んだ選手でチームが構成されるようになるには、小学生年代での普及と環境整備が必要である。現状を考えると、現在の高校女子サッカー部に課せられた使命は、生涯スポーツとしてサッカーを楽しむことができる技術と姿勢を獲得させることであると感じている。そうすることが今後の女子サッカーの人口を増やすことにつながると感じたからだ。今回は、3 年間という限られた時間の中で競技力をいかに向上させるかということに着目して研究を進めた。

2. 石川県の女子サッカー人口

右の表は過去 6 年間におけるサッカー協会への選手登録数を示したものである。これまで石川県サッカー協会女子連盟では、女子児童・女性対象のサッカー教室開催による普及、トレセン活動による育成、国体活動による強化に取り組んでいる。

平成 24 年度からは女子サッカーもインターハイの正式種目として加わったことにより、石川県でも総体と新人大会で女子の部が開催されることとなった。本校の他に星稜高校、大聖寺高校、さらに平成 25 年度には、金沢市立工業高校、七尾高校が石川県サッカー協会に入会した。これにより、小学校卒業後、サッカーから離れていた子どもたちや、新たにサッカーを始める子どもたちが、インターハイ出場を目指し、高校の部活動としてサッカーをすることができる環境が徐々に作られてきている。このことが、中学時でのサッカー離れの防止、さらには中学校での女子部の設立につながることを願っている。

(表 1) 石川県サッカー協会の女子選手登録数

年度 (西暦)	一般	高校生	中学生	小学生
平成 20 年度 (2008)	51	13	34	97
平成 21 年度 (2009)	58	11	46	88
平成 22 年度 (2010)	64	15	44	122
平成 23 年度 (2011)	67	18	42	114
平成 24 年度 (2012)	68	73	33	127
平成 25 年度 (2013)	65	102	46	139

3. 金沢伏見高校女子サッカーの歩み

平成 21 年度に、当時の男子サッカー部顧問の呼びかけで 8 名の部員が集まり、活動を開始した。平成 22 年度には新たに 2 名の部員が加わり、週に 2 日練習をしていた。当時は専属の指導者がおらず、ほとんどが初心者であったため、充実した練習からはほど遠かった。平成 23 年度に私が初任として赴任し、専属の指導者として活動を開始した。練習日も週に 2 日だったものから徐々に増やし、6 月には初の対外試合も行った。しかし、3 年生が引退してからは 11 人が揃わず、大会などに出場することはできなかった。それでも、フットサルの大会や練習試合を積極的に組み、次年度の総体での優勝を目標に日々の練習に取り組んだ。平成 24 年度には、2、3 年生の勧誘活

動により、多くの新生が入部し、本格的に競技力向上に力を入れ始めた。現在では週 6 日の練習と夏の合宿、春の強化遠征などを行い、石川県 No. 1 を目指している。

また、中学校への学校説明でも特色ある部活動として紹介し、最近では女子サッカー部への入部を希望して入学する生徒も出てきた。

(表 2) 部員数の推移 () 内は初心者の数

年度 (西暦)	1 年	2 年	3 年	計
平成 21 年度 (2009)	7 (6)	1 (1)	—	8 (7)
平成 22 年度 (2010)	2 (0)	7	1	10 (0)
平成 23 年度 (2011)	6 (5)	2	7	15 (5)
平成 24 年度 (2012)	10 (8)	6	3	19 (8)
平成 25 年度 (2013)	5 (5)	10	6	21 (5)

(平成 23 年 6 月 23 日北陸中日新聞掲載写真)

4. 初心者の競技力向上に向けた取り組み

(1) 体育館でのトレーニング

体育館でのトレーニングの目的は、まずボールに触れる回数を確保することである。グラウンドで練習をした場合、ボールがイレギュラーバウンドをしたり、失敗すると遠くまでボールを取りに行ったりしなければならない。そのため、十分な練習量をこなせず上達に時間がかかる。もう一つの目的は、正しい姿勢とボールの捉え方を習得させることである。体育館でのトレーニングはボールの回転や軌道が見やすいため、上手くボールを捉えられたときの感覚を掴みやすく、練習の効率を上げることができる。

(2) 高校女子合同審判講習会の実施

5月に1年生全員が審判講習を受講している。これは、大会では生徒がアシスタントレフリーを務めることもあり、初心者用にルールの説明などを中心に行っている。また、他校の部員と合同で実施することで、お互いにコミュニケーションを取り、良い関係を築いている。これは、大会などではライバルであるが、高校女子サッカーを盛り上げる仲間であるという感覚を持たせ、サッカーに対する意識の向上を狙いとしている。



(3) 映像を活用したミーティング

① 対外試合の映像

自分たちの試合の映像をできる限り見せるようにしている。練習の成果が出たプレーや良いプレーについては何度も見せ、自分たちの成長を実感させることで、その後の練習意欲の向上につなげている。また、新たな課題も発見することができ、全員で共有することで、今後の練習の方向性を定めている。

② その他の映像

日本代表の試合や海外のリーグ戦などを積極的に見る時間を設けている。その中で、戦術観を高めたり、良いプレーのイメージを持たせたりするようにした。

(4) 試合経験

平成23年度は部員数が少なかったということもあり、まずボールを蹴る・止める・運ぶという基礎技術に力を入れていた。平成24年度からはできる限り試合の機会を増やし、実践の中で経験を積ませている。石川県内には女子チーム数が少ないため、富山県や福井県の女子チームや小中学生男子チームと試合を組んで、試合数の確保に努めている。

(表3) 年度別試合日数

年度(西暦)	試合日数
平成23年度 (2011)	18
平成24年度 (2012)	39
平成25年度 (2013)	31

(平成25年度は9月末現在)

5. 成果と課題

(1) 成果

- ① トレーニング・試合経験の積み重ねにより、試合で勝つことが増え、少しずつ自信もつけてきた。格上の相手にもあきらめず粘りを見せることができるようになり、大会では昨年度に比べ好成績を収めている。
- ② ボールを止める、蹴るといった基礎的な技術の向上と、良いプレーのイメージを共有していることにより、試合で意図を感じるプレーから得点を取れるようになった。(資料：映像)

(表 4) 主な大会結果

年度 (西暦)	県総体	県選手権	新人大会	県リーグ
平成 24 年度 (2012)	3 位	2 位	2 位	5 位
平成 25 年度 (2013)	2 位	2 位	—	3 位

(2) 課題

- ① 学年間や各個人の基礎技術力の差が大きい中で、現在は同じ練習をさせている。技術レベルに合わせて目標を設定し、常に向上心を持たせる工夫が必要であると感じた。
- ② 高校から初心者でサッカーを始めたので、技術力の面では大きく向上をした。しかし、総合力で上回っていると思われる場合でも、苦戦したり、負けてしまったりすることがある。精神的な面も含めた競技力の向上を目指し、勝利への執着心を植えつけさせたい。

6. おわりに

「サッカーは子供を大人に変え、大人を紳士に変える」という言葉がある。私は小学校 3 年の時からサッカーの世界に足を踏み入れ、今日までサッカーと共に人生を歩んできた。サッカー活動の中で様々な経験を積み、試合の勝ち負け以外でも大切なことを学び、今の私の人格が形成されている。また、元日本代表監督であるイビチャ・オシム氏は「大事なのは今日の結果ではなく、子供が明日どういうプレーをするかを楽しみにする気持ちを持つことである」と述べている。これは、私の指導理念ともなっている。チームを名実ともに石川県 No. 1 に成長させ、部員に良い影響を与えられるように、日々指導の改善をしていきたい。

自転車競技

～より速く走るために～

自転車競技専門部
県立内灘高等学校 守屋 英樹

1 はじめに

みなさんは「自転車競技」と聞くとどのようなイメージを持たれるでしょうか。「競輪」「落車」「ツールド・フランス」など、様々な答えが出てくるのではないかと思います。中でも特に「競輪」のイメージをお持ちの方が多いのではないでしょうか。実際に私も「何のスポーツをしていたのですか」と聞かれ、「自転車競技をしていました」と答えると「ああ、競輪ね」と言われることがほとんどです。実は「競輪」とは自転車競技の種目の一つなのです。

最近では自転車ブームと言われ、大型専門店が各地に店を出しています。そして休日には、町中や郊外でカラフルな服をきたロードレーサーが楽しそうに走っている姿を見かける事が多くなりました。自転車が多くの方に受け入れられた証拠だと私は考えます。しかし、このブームは「ピスト」と呼ばれるブレーキの無い自転車で町中を走る社会問題を招くなど、自転車に関する理解不足を明らかにしています。

「自転車」がブームになったとはいえ、自転車とその競技の詳細は広く知られてはいません。今日は「自転車競技」について私の経験を交えてお話させていただきます。今回の発表が「自転車競技」を理解していただく一助となれば幸いです。そして自転車競技の本質である「誰よりもより速く走る」ためにどうしているのかということをお話したいと思います。

2 競技種目（高校生対象に実施している種目）

(1) ロードレース ・ワンデイ・ロードレース

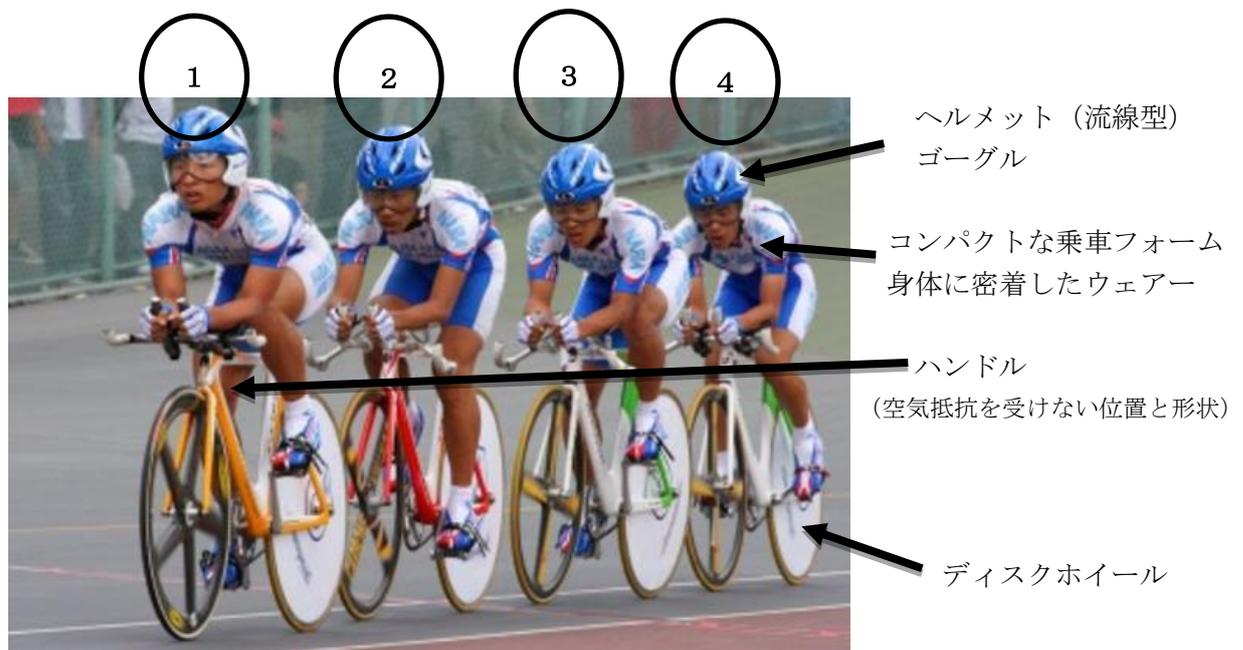
(2) トラックレース ・スプリント
・ケイリン
・スクラッチ
・ポイントレース
・1 Km T・T
・3 km I・P
・4 Km速度競走
・5 0 0 m T・T
・4 k m T・P
・チームスプリント

3 より速く走るために

自転車競技の本質は「誰よりも早く走りゴールラインを切る」ことにあると考えます。もちろん、レース中の駆け引きなどの要素もありますが、ここでは最もシンプルな「より速く走る」ために何をしているかについて述べたいと思います。

(1) 空気抵抗

「より速く走る」ために無視してはならないものが空気抵抗です。これをどのように利用していくかが速く走るための鍵となります。以下の写真を見ながら、重要なポイントをお話したいと思います。



- ① 先頭1の選手が使うエネルギーを100とすると2～4の選手は約半分の力で追走が可能です。
- ② 選手3、4と後ろに行けば行くほど空気抵抗は減り、より少ない労力での走行ができ、体力も温存することができます。
- ③ 走行中に選手にかかる抵抗は、80%が空気抵抗で残り20%はタイヤの転がり抵抗等となります。
(つまり40km/hで自転車を走らせるのに必要な力の80%は空気抵抗を相殺するのに使われるという事)

(2) 機材

① 自転車のフレーム・ハンドルの形状、ヘルメット、ウェアや車輪等について

自転車記録の短縮はそのまま機材の進化といえます。選手のウェアやヘルメットなどは空気抵抗を受けにくいようにより肌に密着した素材や形状へと姿を変えています。またフレームなどはスチール製からカーボン、チタン、アルミ製などの軽量素材へと置き換わり、またハンドルなどもいかに空気抵抗を減らすかということをも命題とした形状へと進化を遂げています。その中でも最新のホイールの進化は驚くものがあります。写真のように前輪は5本スポーク、後輪は円盤のようなディスクホイールが主流となっています。ともに素材はカーボンですが、その内部構造には違いが見られます。従来はカーボンの板をテンションで張り付けて有ったのですが、現在の主流は板をそのまま張り付ける方法となっています。この車輪が開発されてから日本記録がほぼ塗り替えられたほどの革新的な機材でした。一説には1kmで約1秒タイムが縮小されるといった目覚ましい効果をあげたそうです。ただ、非常に高額なため国体開催県ぐらいしか持っていないのが現状です。

② タイヤの空気圧について

重量約100グラムのタイヤの中にコンプレッサーを使用して高圧で13～15気圧入れます。皆さんもご存知のとおり、空気圧を高めると転がり抵抗削減され、最高速を伸ばすことができます。ちなみに普通自動車の空気圧は2～3気圧とされていますので、約5～6倍の圧力となります。

③ 人(乗車フォーム)について

上腕を曲げ、出来るだけコンパクトに(空気抵抗を受けないよう)乗車するよう指導しています。またきれいにペダルを回すため(力の伝達ロス無くす為)にバイクの後ろで生徒を走らせる練習を毎日取り入れています。ちなみに入部して間もない1年生でも時速70kmのバイクに着いてくる事が出来ます。いかに空気抵抗が自転車の最大の敵であるかを示すエピソードかと思えます。

④ 練習（トレーニング）について

次に内灘高校の年間の練習内容を紹介します。3月～4月は距離を走りこむ必要があるため、ロードレーサー乗り込みます。5月からはトラックに舞台を移してスピード練習になります。6月～11月まではそれまでの成果を発揮する試合が続きます。新人戦が終わるとプレオフシーズンとなり、軽い負荷をかけるメニューに移行しながらトラックを走ります。寒くなってくると外を走ることが出来ないため、室内トレーニングになります。基礎体力、筋力をつけるためにウエイトやパワーマックスを行います。練習時間は、4月～国体までは平日に朝練習（6時15分～7時30分まで）を行い、そして放課後に通常の練習を行います。平生の地道な練習こそが勝利につながるため、どれも疎かにできません。

4 まとめ

選手は速く走るために日々努力しています。練習内容に若干の差異はあると思いますが、ほぼ日本中の高校生は同じようなトレーニングを積んでいます。これが意味するところは生徒間に大きな差が出てくるといってもあります。（もちろん体格・体力差を考慮する必要はあると思いますが）このような現状で、やはり大きな影響力を持つものが機材の差であると考えます。今は機材戦争といえる状況です。選手の力が拮抗しているなら、機材がそろっているほうが勝つ可能性は高いのは道理です。実際に常勝チームは優れた機材をそろえています。しかし、機材の良し悪しだけで決まらないところがスポーツである自転車競技の面白いところです。優れた機材でもそれを操るのは人ですので、競技者のメンタルによってレースの行方は判らなくなります。言い換えると、どれほどよい機材を用意してもそれをあやつる選手と指導者の勝ちたいと思う気持ちが薄ければ絶対に勝利にはつながらないのです。

私は長年、自転車競技に携わってきました。その経験を顧みるとやはり最後にものを言うのは心の持ちようです。そしてその心を最大限に生かすものはよい機材です。選手が求めるよい機材が充実すれば、今後さらに石川県の自転車競技界の発展につながるのではないのでしょうか。また、自転車競技人口の更なる拡大のために、力を尽くしたいと思います。

1. はじめに

昨年5月、男子日本ホッケー（サムライジャパン）は、岐阜県で行われたロンドンオリンピック最終予選にて、残念ながら44年ぶりの出場を後一步のところ逃した。一方、女子（さくらジャパン）はオリンピック3大会連続出場という快挙を成し遂げた。この活躍はテレビなどのメディアを通して日本国内で注目され、ホッケー競技は一時的ではあるが脚光を浴びた。オリンピック種目や国民体育大会の正式種目として実施されているホッケーは、本来はメジャー的要素を十分に持っていない。しかし、テレビやラジオで取り上げられるのは大会期間中のみであり、世界的に普及しているホッケーは国内においてはマイナースポーツとして扱われている。また、競技人口も少なくあまり注目されていないのが現状であり、本県においてもそこは同じである。石川県においては全くの未普及競技であったが、60総体にさきがけ昭和56年に富来高校に男子ホッケー部が創部され、翌年、元全日本代表の大屋省吾先生が着任した。昭和59年には中島高校に当時日本の最高峰チームである天理大学出身の松本豊成先生が着任し、女子ホッケー部の活動が始まった。県としては歴史の浅い競技である。また、競技拠点地が過疎の進む能登地区ということで、競技人口の拡大が非常に厳しい地盤の中での活動であった。しかし、平成3年の石川県体のホッケー競技で総合優勝という輝かしい成績を残している。その後も、拠点地でありホッケー専用の競技場を持つ志賀町富来地区を中心に活動を行っているが、順調な活動をしているとは言えない。そのような状況のなかでの本県ホッケー専門部の普及のとりくみを紹介していきたい。

2. ホッケーとは

私が、初対面の人との会話の中で「ホッケーをしています。」と言った後によく返ってくる言葉は「氷の上でやるやつか」、「冬のスポーツをしているわりにはよく日焼けしてますね」などで、アイスホッケーを思い浮かべられます。また、ホッケーはアイスホッケーに対してフィールドホッケーやグラウンドホッケーなどと言われますが「ホッケー」（Hockey）が競技名です。ホッケーはイギリスで生まれ、クリケットの選手たちが試合のできない冬場に始めたのが基礎とされています。競技場の広さはサッカーより一回り小さく（縦91.4M×横55M）、スティックという道具を用いてゴルフボールのように硬い野球ほど大きさのボールをゴールに入れる競技です。現在は、人工芝のグラウンドでゲームが行われることが主流となっています。アイスホッケーとは違いスティックの片面しか使用できないのが特徴で、ボールを巧に操作したり150キロを超えるシュートが放たれるなど、テクニックとスピード感溢れるプレーが醍醐味のスポーツです。（1）

日本におけるホッケーの歴史

日本には1906年イギリス人牧師のウィリアム・トーマス・グレーによって慶応義塾に伝えられました。その後、東京や関西にチームができ日本体育協会に早くから加盟し活動をしています。女子ホッケーも昭和6年に全日本選手権大会開催されています。その後は、大学・高校・社会人チームが結成されるようになり、また、国体によるホッケー普及とチーム数増加に伴い、各種大会の開催も相まって国内におけるホッケー競技は大きく発展しました。1998年には日本リーグがスタートしています。

（2）オリンピックでの活躍

1932年のロサンゼルスオリンピックでは男子が銀メダルを獲得しています。男子は1960年のローマ大会から東京、メキシコと3大会連続出場を果たしましたが、その後は人工芝の導入によるホッケー競技の劇的な変化もあり出場を果たせずにいます。しかしながら、国内の人工芝グラウンドも徐々に増え、世界に挑戦するバックグラウンドが整った中、女子は、2004年のアテネら3大会連続して出場しています。男女のレベルは共に世界ランク10位前後の力を持っています。

3. 日本のホッケーの現状

(1) 登録競技人口

ホッケーは、オリンピック種目に採用されるほど、世界的には競技人口が多い。しかし、2010年に行われた調査では、日本ホッケーの登録競技者数は10,540人と、他の競技と比べてもこの数値は格段に低い。

団体名	登録者数 (人)		
	全体	男	女
日本サッカー協会	888,916	852,233	36,683
日本バスケットボール協会	616,839	—	—
日本バレーボール協会	429,830	120,894	308,936
日本ハンドボール協会	83,295	56,146	27,149
日本ソフトテニス協会	461,508	233,193	228,315
日本卓球協会	300,096	187,474	112,622
日本ホッケー協会	10,540	5,900	4,640

(笹川スポーツ財団 2011 を参考)

(2) ジュニア (小中学生) のホッケー事情

小学生のホッケー競技者は主にスポーツ少年団に所属し、休日に活動していることが多い。小学生チームの登録は100を切る。中学生は部活動を中心に100を超えるチーム数がある。中体連に加盟できていないが全国大会を開催し、ブロック予選も行っている。共に、国体開催地にチームが作られている場合が多い。

(3) 地域による競技力の格差

全国大会で上位を占めるのは、国体開催を契機に地域にホッケー競技が根づいた地域が中心である。国体開催以降、競技施設の充実と、競技者及び指導者の確保のできている地域とそうでない地域との差は大きくなっている。当然地域のホッケー関係者の努力があったからこそであるが、その影響から地域による競技力にも大きく差が出てきている。

4. 石川県ホッケー専門部の歩みと現状

(1) 加盟から現在

昭和57年に、60総体にめがけて志賀町(旧富来町)の県立富来高校にホッケーの指導者配置と同時にホッケー部の創部。同年、県高体連ホッケー専門部も設置される。その2年後に、中島高校に女子部が創部される。富来高校男子は創部2年で北信越大会優勝の快挙を遂げ、地元志賀町(旧富来町)で行われた全国高校総体(60総体)でもベスト8に進出する活躍を残した。富来高校にはその後、女子部も創部される。中島高校も全国選抜大会に出場するなど、強化が進んだ。平成3年に行われた石川国体で男子は富来高校単独チームで少年男子3位という成績を残し、ホッケー競技の総合優勝に大きく貢献した。

男子は富来高校1校、女子は富来高校、中島高校の2校の活動が続いたが、平成8年に中島高校が指導者転勤に伴い活動休止、廃部となる。しかし、金沢北陵高校に部を立ち上げ、現状維持となる。富来高校が、平成23年統廃合により廃校となるが、統合した志賀高校に男女ホッケー部が設置される。県内の高校においてホッケー部のある学校は、男子1校、女子2校という状況は変わらずにいる。

(2) 現状

現在、県内においてホッケー部のある学校は、志賀高校の男女ホッケー部と、金沢北陵高校の女子ホッケー部のみである。志賀高校は、3年続きで部員不足状態である。金沢北陵高校は、部員は確保できているが部員全てが初心者である。県内の数少ない部がこのような状態で、お互い切磋琢磨して競技力を高めことなどは容易でない。指導者の学校内外での熱意ある取り組みと努力の継続をしなければ部員確保は困難であり、大きな課題である。また、全国的にもチーム数は少なく男子は約100、女子は約80チームである。各都道府県とも、国体の開催地に男女各1～2チームという状態である。

(3) 経済的負担について

ホッケーは道具を使用する競技であり、その購入に経済的負担がかかる。特にゴールキーパー道具は、1セットで30万円前後の金額がかかる。また、県内に対戦相手がいないうえに、人工芝のホッケー設備での練習場所を求め県外への活動が多く、強化費だけでは補いきれないところがある。

(4) 指導者

加盟校も競技者数も少ない上に、専門的な指導者が3人という状態である。現指導者の後継者が出てきていない。また、審判員も県協会として育ておらず厳しい状況である。

5. 専門部の取り組みと課題

石川県では、高校だけでなく県協会の一般の競技者の確保も厳しい状態にある。拠点地が能登地区というハンディがある中、金沢地区での競技活動の拡大を図りたいところであるが、難しい面が多々ある。本県では協会が中心に専門部も一体となって拠点地でのホッケーの普及のため、下記の継続的な取り組みをしている。

(1) ジュニアの育成

①小学生のホッケー教室指導

志賀町において、小学生のホッケー教室を週2回継続的に行っている。高校生も一緒になって練習をしたり教える機会を設けるなどして連携を意識している。平成22年の全国小学生大会で女子チームが3位、男子チームは西日本大会で3位という成績を収める成果もあった。この学年の教室生は全員富来中学校入学後もホッケー部へ入部した。この活動を他の地域にも広めることが課題である。

②中学生との合同練習

県内には、富来中学に唯一男女ホッケー部を有する。その中学生と、県ホッケー場にて日頃より合同練習を行い選手との交流と共に競技者の育成と確保に努めている。

③高校の開放講座によるホッケー教室

平成24年には志賀高校の開放講座として、志賀地区の小学生を対象としたホッケー教室を4回行った。8名の参加者があり、半数以上がホッケーを初めて見る子どもたちであった。児童には好評で、「もっとホッケーがしたい」と望む声もあった。このような単発的な教室でも開くことのできるスタッフの育成を課題としてあげたい。

(2) ホッケー場の人工芝化の陳情

ホッケーは現在、人工芝で各種主要大会は開かれる。本県には、ホッケー専用競技場はあるが、天然芝であり、最新ホッケーの技術取得に遅れをとっている。石川国体以降、町や県に競技場の整備をお願いしているところであるが実現できずにいる。ホッケー場の人工芝化は競技力の向上とともに、間違いなく競技者増が望めるものと確信している。

(3) 他の競技者との協力

地域性の問題から、部員確保には常に苦勞してきている。部員不足なので大会には出場しないというのは競技の普及につながらないため、学校内においては他の運動部員の協力を得て大会への出場を続けている。そういう中でも、ブロック予選を勝ち抜けインターハイへの出場を数回果たしてきている。他の部の協

力を得られる活動を普段より心がけているからこそ出場ができるのであって、部員の人間関係作りにも役立っている。

(4) 経験者の発掘

県内の成人競技者の増加もなかなか見込めない中、大学に入学後、ホッケーを始め学生ホッケー界で活躍する本県出身者が近年増えてきている。国体のふるさと制度の活用で、県の選手代表として出場してもらっているが、将来的にUターンし本県ホッケーの指導に携わってもらえるよう働きかけを行っている。

6. 今後の取り組み（まとめ）

このように、競技普及と活動の継続のためにさまざま取り組みを行っている。マイナー競技ゆえに、人口の少ない地域で活動していてもなかなか競技の普及は難しいといえる。しかし、石川のホッケーの発祥の地で普及活動を行うことは、とても大切なことであり情熱を注げる環境にもある。現在、志賀地区では石川国体のときの成年チームの2世が中学校～大学のホッケーで活躍するようになってきている。また、少年チームで活躍したメンバーの2世が小学校でホッケーをやり始めていて保護者の理解も大きい。地道な活動を継続してきたことで良き成果が出てきていると言える。また、マイナー競技であるがゆえに、「チャンスを生かせる機会が多い」競技と言える。オリンピック日本代表選手になれる確立やそれにチャレンジする可能性、そうでなくても自分が代表選手と同じコートで戦った間柄になれる可能性など、メジャー競技ではなかなか経験できないこともできるのがホッケー競技。そのような可能性を生徒たちに理解させていきたい。さらに、県代表選手として県外へ出かけることは、人間形成に大きく役立っている。そこで身につける礼儀、人との交流、ホッケーという競技に携わったことで生徒自身が自分を伸ばすことができたと思える指導を心がけ、今後もホッケー普及の活動を地道に継続して行きたいと思います。その積み重ねが、将来のホッケー専門部の充実につながるものと信じています。

石川県のホッケーの灯を消すことのないよう、「継続は力なり」「悪いことばかり続かない」を胸に頑張っていきたいと思います。

「県レスリング協会のポテンシャル力」
～協会一丸となつての組織的取り組み～

レスリング専門部

県立野々市明倫高等学校 加藤 欣央

1 はじめに

レスリングの歴史は昭和 38 年発足以来、本年をもって 50 周年を迎えることができました。当時、星稜高校で県下初のレスリング部を設立し現在は 7 校にレスリング選手が在席しています。また、高校生のみならず中学生や小学生といったジュニア選手が、ここ数年ようやく安定した数を保ち続けています。

県協会が発足して 50 年になりますが、「国民体育大会」において 44 年間連続入賞（資料 1）できた背景には、常に全国チャンピオンの育成に指導や資金援助をして戴いた方々のおかげだと思っております。

ルールの変更や選手の変化に伴い様々な課題が出てきました。まだまだ改善することが山積みですが年々修正しながら強化しているのが現状です。

2 伝統の八田イズム

八田一郎（はった・いちろう）1906 年 6 月 3 日生まれ広島県出身。

1929 年（昭和 4 年）早大柔道部の一員として米国へ遠征し、ワシントン大でレスリングと遭遇。帰国後レスリング部をつくり、大日本アマチュアレスリング協会（現日本協会の前身）の創設に尽力した。

1932 年（昭和 7 年）のロサンゼルス・オリンピックにレスリング代表選手として出場した。以後、指導者に転身し在任中 7 度のオリンピックに参加し、合計 16 個の金メダルを獲得。そのユニークな指導方法は「八田イズム」として世間でも注目された。（J. W. F. H. P. 引用）



八田氏顔写真

(1)負けた理由を探すな

「どんな時でも寝られるようにしろ」合宿では電気や音楽をつけっぱなしにした状態で寝させ。時には、夜中にたたき起し点呼をとってまた寝させる。

(2)完全フォール勝ちを指示

負けた理由をレフェリーのせいにし、八田会長の逆鱗げきりんに触れた。「完全に敵をフォールできなかつたら負けと思え」と言っている。

(3)左右の平均

「得意技となると左右どちらかとなるのが普通だ。それじゃ半分のみしか出せない」とし、日常生活から利き腕と反対の手を使って行動することを課した。

(4)夢の中でも勝て

「夢の中でも負けてはいけない。自分を襲ったヤツをもう一度夢の中へ引っ張り出し、立ち向かい、やっつけるくらいでなければ、本当の試合では勝てない」と自信をつけさせるために「負けない」という気概を植えつけた。

(5)苦手の克服

選手にとって簡単に勝てる相手と練習は楽しい。逆に、強い相手と戦うのは嫌なもの。世界のいろいろなタイプと戦い、何度も戦ううちに相手の弱点も見えてきて攻略の糸口もつかめる。

(6)ベン学の勧め

トイレは、用をたすだけでなく、勉強室・研究室という趣で設計されていた。「1 日 1 個英単語を覚えれば 1 年で 365 個覚える」として選手に課し時間を大切にすることを養うことで、練習時間を無駄にしない姿勢を持たせる意味があった。

(7)礼儀の重要性

あいさつはもちろんだが、洋食のマナーにも厳しく、マナーに反する食べ方をすれば“未開の国の人間”として見下され、マットの上でも相手に優越感をもたれてしまう。私生活の未熟ぶりは、相手に優越感を持たせてしまう。一流の選手はマットを降りても一流の行動を望んだ。

(8)マスコミを見方にしろ

「ライオンとにらめっこで精神を鍛える」「沖縄へハブとマングースの戦いを見せに行き、戦う魂を学んだ」といった話も有名だが、強化に直接の実効性があったかは疑問。しかし、世間の注目を集めることで選手を追い込み奮起させる十分な役割をはたした。

3 レスリング競技について

(1)レスリングの特性

マット上で2人の競技者が相対し、格闘して相手を組み伏せ、その両肩を同時にマットにつける（フォール）ことで勝負が決まる。

(2)F I F Aの4大理念

- ①トータル・レスリング……………（活動的な技術展開）
- ②ユニバーサル・レスリング……（多種多様な技術展開）
- ③リスク・レスリング……………（積極果敢な技術展開）
- ④アトラクティブ・レスリング…（魅力あふれる技術展開）

(3)レスリングの種類

- ①フリー・スタイル（反則以外は全身どこを使っても良い）
- ②グレコローマン・スタイル（下半身を攻防に用いることができない）

(4)レスリングの試合

- ①マット……………直径9mの円の内側に1m幅のレッドラインを置いたもので、内径7mのセンター（イエローエリア）で戦う。
- ②時間……………3分×2ピリオド（休憩30秒）
- ③年齢構成……スクールボーイ（13～14歳）、カデット（15歳～16歳）
ジュニア（17歳～20歳）、シニア（20歳以上）
- ④階級……………50kg級、55kg級、60kg級、66kg級、74kg級、84kg級、96kg級、120kg級
（全て高校生の階級）

4 平成24年度事業について

(1)国際交流事業

- ・オレゴン州選抜チームV S 石川県選抜チーム
- ・県内高校で体験授業のほか観光や県知事表敬訪問など行った。

(2)強化事業

- ①長距離ランニング
 - ・金沢北陵高校～ふくみつ華山温泉（約20km）
 - ※ 過去に志賀町～気多大社「必勝祈願ランニング」
- ②ナショナル・トレーニングセンター
 - ・オリンピックコーチやオリンピック選手から指導
 - ・アスリート・ビレッジでの食事等

5 平成25年度の大会について

月	大会名	会場	月	大会名	会場
4月	JOC全日本ジュニア選手権	神奈川	8月	インターハイ	長崎県
	県春季選手権大会	志賀町		全国高校グレコ大会	岡山県
5月	県高校総体	志賀町	10月	国民体育大会	東京都
6月	金沢市民体育大会	金沢市	11月	県新人大会	志賀町
	北信越大会（女子第1回）	石川県		選抜北信越大会	福井県
7月	トーナメント志賀大会	志賀町	12月	NTS東海北信越大会	静岡県
	県民体育大会	志賀町	3月	全国選抜大会	新潟県
	国体選考会	志賀町			

規模（県7・ブロック3・全国5）

6 平成25年度事業について

(1)少年男子

- ・日帰り練習会 …………… 1回（県内1）
- ・県内合宿 …………… 7回
- ・県外合宿 …………… 8回（高校7・大学1）
- ・科学トレーニング事業 … 4名（A指定）

(2)合同練習会

- ・県内の場合、ほとんどが少年・成年合同で強化

7 ジュニア一貫指導について

(1)組織

- ・指導者4名（日本体育協会公認指導員1名）
- ・指定選手（小学生17名）

(2)事業内容

- ・日帰り練習会 ……… 9回（県内6、県外3）
- ・県外合宿 …………… 2回
- ・講習会 …………… 2回（メンタルトレーニング・食育プログラム）

8 ナショナル・トレーニング・システム（NTS）

(1)主催

- ・国立スポーツ科学センター（JISS）

(2)目的

- ・発掘、育成のため

(3)一貫指導

- ・「日本レスリングの普及と強化のため、将来日本代表選手となる優秀な素材を発掘し、よい環境で一貫した指導を与えて育成する」

(4)歴史

- ・2001年より本格的にスタート（以前は、東日本・西日本で実施）

(5)JOCエリートアカデミーについて

- ・今年度で第6期生（8選手）レスリングは3名、他は卓球3名、フェンシング2名が入校

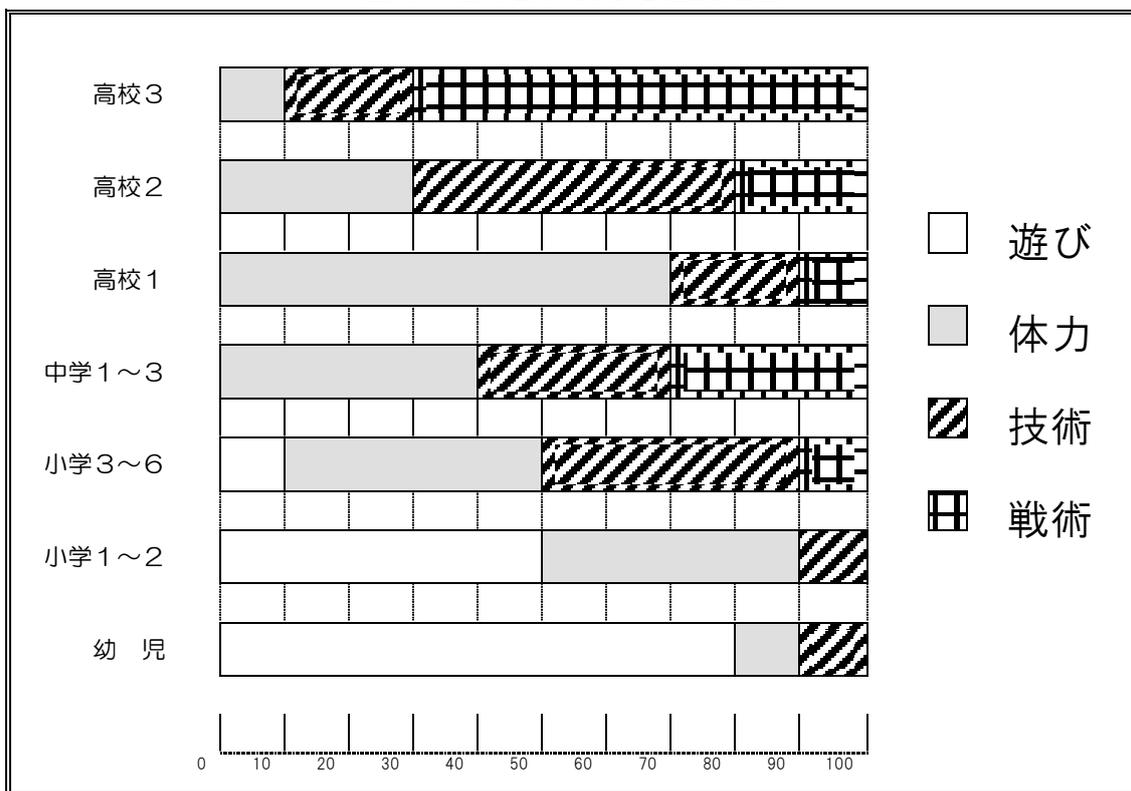
(6)各ブロックについて

- ①北海道・東北 ②関東 ③東海・北信越 ④関西 ⑤中国・四国 ⑥九州

9 具体的内容について

- (1)各年齢における活動内容（図1）
(2)高校における活動の割合
(3)競技力向上における考え方

図1 各年齢における活動内容



10 成果と課題

昭和38年に県内1校（星稜高）でスタートし、20年後に2校目（高浜高）その6年後に3校目（金沢市立工業高）と決して人数は多いとは言えないが、少数精鋭で全国大会に挑んできました。「レスリング競技は、人数が少ないから入賞するんだ」と言われ、我々は常に全国で入賞、全国で1位の選手を育てて他競技団体を納得させようという気持ちで50年間育成してきました。

現在は、ようやくジュニア育成が安定し競技者数も増加しつつあります。一貫指導の成果を結果として残し、県外流出を防ぎ石川県でも全国を狙える指導を継続して努めたいと思います。全国で勝つためには、決して楽な練習はありません。選手の特性を生かしビジョンを持って、これからも結果を出せる育成が課題となります。

11 おわりに

国民体育大会入賞は、44年連続で途切れましたが、協会員の技術指導のみならず宿泊施設や資金援助等たくさんの方々のおかげで結果が出せたと思います。これからも協会員が丸となって、幼児から社会人をサポートし石川県のスポーツを側面から支える役割を果たし、競技の普及・発展、競技力の向上、青少年の健全育成に継続して尽くしていきたいと思ひます。

国民体育大会入賞者一覽 (昭和42年～昭和63年)

昭和38年9月協会設立

年	回	実施年	開催地	順位	所 属	人数
	第18回	昭和38年	山 口			0
	第19回	昭和39年	新 潟			0
	第20回	昭和40年	岐 阜			0
	第21回	昭和41年	大 分			0
1	第22回	昭和42年	埼 玉	3位	星稜高校	1
2	第23回	昭和43年	福 井	5位	星稜高校	2
3	第24回	昭和44年	長 崎	5位	拓殖大学	3
				5位	星稜高校	4
4	第25回	昭和45年	岩 手	1位	金沢桜丘高校	5
				3位	星稜高校	6
				5位	星稜高校	7
				5位	星稜高校	8
5	第26回	昭和46年	和歌山	1位	星稜高校	9
				3位	星稜高校	10
				5位	星稜高校	11
				5位	拓殖大学	12
				5位	金沢経済大学	13
6	第27回	昭和47年	鹿児島	2位	星稜高校	14
				5位	星稜高校	15
				1位	星稜高校	16
				3位	星稜高校	17
				4位	金沢経済大学	18
				4位	日本大学	19
7	第28回	昭和48年	千 葉	5位	星稜高校	20
				5位	星稜高校	21
				2位	星稜高校	22
				3位	星稜高校	23
				3位	金沢経済大学	24
				5位	日本大学	25
8	第29回	昭和49年	茨 城	3位	星稜高校	26
				5位	星稜高校	27
				5位	星稜高校	28
				5位	星稜高校	29
				3位	金沢経済大学	30
				3位	日本大学	31
9	第30回	昭和50年	三 重	5位	星稜高校	32
				5位	星稜高校	33
				5位	星稜高校	34
				2位	星稜高校	35
				5位	星稜高校	36
				5位	日本大学	37
				5位	金沢経済大学	38
				5位	金沢経済大学	39
10	第31回	昭和51年	佐 賀	3位	星稜高校	40
				3位	星稜高校	41
11	第32回	昭和52年	青 森	3位	星稜高校	42
				5位	星稜高校	43
				5位	星稜高校	44
				5位	星稜高校	45
				5位	星稜高校	46
				3位	星稜高校	47
				3位	日本大学	48
				5位	法政大学	49
				5位	関東医師製菓	50

年	回	実施年	開催地	順位	所 属	人数
12	第33回	昭和53年	長 野	3位	法政大学	51
				5位	法政大学	52
				3位	日本大学	53
				5位	星稜高校	54
13	第34回	昭和54年	宮 崎	3位	専修大学	55
				1位	星稜高校	56
				1位	星稜高校	57
				5位	星稜高校	58
14	第35回	昭和55年	栃 木	5位	専修大学	59
				5位	専修大学	60
				2位	星稜高校	61
				5位	星稜高校	62
15	第36回	昭和56年	滋 賀	5位	専修大学	63
				5位	東海大学	64
				3位	星稜高校	65
				5位	星稜高校	66
				5位	星稜高校	67
16	第37回	昭和57年	島 根	5位	星稜高校	68
				5位	星稜高校	69
				5位	星稜高校	70
				5位	星稜高校	71
				5位	星稜高校	72
				5位	星稜高校	73
				5位	法政大学	74
				5位	専修大学	75
17	第38回	昭和58年	群 馬	3位	東海大学	76
				5位	東海大学	77
				3位	専修大学	78
				5位	片山甘々堂	79
				5位	星稜高校	80
				3位	星稜高校	81
				5位	星稜高校	82
				3位	星稜高校	83
18	第39回	昭和59年	奈 良	2位	星稜高校	84
				3位	星稜高校	85
19	第40回	昭和60年	鳥 取	2位	星稜高校	86
				5位	星稜高校	87
				5位	星稜高校	88
20	第41回	昭和61年	山 梨	5位	東海大学	89
				5位	東海大学	90
				5位	高浜高校	91
				5位	星稜高校	92
21	第42回	昭和62年	沖 縄	5位	高浜高校教	93
				3位	東海大学	94
				5位	東海大学	95
				5位	星稜高校	96
				3位	高浜高校	97
22	第43回	昭和63年	京 都	5位	東海大学	98
				3位	東海大学	99
				5位	東海大学	100
				5位	片山甘々堂	101
				5位	星稜高校	102
				5位	高浜高校	103

国民体育大会入賞者一覽 (平成元年～平成25年)

年	回	実施年	開催地	順位	所 属	人数
23	第44回	平成元年	北海道	3位	東海大学	104
				5位	専修大学	105
				5位	桐畑運送	106
				3位	金沢市立工業高校	107
				5位	高浜高校	108
				5位	星稜高校	109
24	第45回	平成2年	福 岡	5位	高浜高校教	110
				1位	東海大学	111
				5位	県教育委員会	112
				3位	桐畑運送	113
				5位	金沢市立工業高校	114
25	第46回	平成3年	石 川	2位	県教育委員会	115
				3位	(株)桐畑	116
				3位	志賀町教育委員会	117
				1位	陸上自衛隊金沢駐屯地	118
				2位	県教育委員会	119
				1位	八田接骨院	120
				1位	陸上自衛隊金沢駐屯地	121
				3位	星稜高校	122
				5位	星稜高校	123
				2位	金沢市立工業高校	124
				1位	星稜高校	125
				3位	星稜高校	126
				2位	星稜高校	127
2位	高浜高校	128				
26	第47回	平成4年	山 形	3位	県体育施設管理事務所	129
				1位	七尾地方教育事務所	130
				5位	法政大学	131
				5位	星稜高校	132
				3位	金沢市立工業高校	133
				5位	星稜高校	134
				5位	星稜高校	135
				3位	高浜高校	136
27	第48回	平成5年	徳 島	5位	県体育施設管理事務所	137
				5位	七尾地方教育事務所	138
				5位	医王養護学校教	139
				5位	専修大学	140
				3位	星稜高校	141
				3位	金沢市立工業高校	142
				5位	金沢市立工業高校	143
28	第49回	平成6年	愛 知	5位	専修大学	144
				5位	松任農業高校	145
29	第50回	平成7年	福 島	5位	県体育施設管理事務所	146
				5位	専修大学	147
				5位	東海大学	148
				5位	星稜高校	149
				5位	金沢市立工業高校	150

1位 …… 11名 (6.0%)
 2位 …… 11名 (6.0%)
 3位 …… 45名 (23.0%)
 5位 …… 132名 (66.0%)

年	回	実施年	開催地	順位	所 属	人数
30	第51回	平成8年	広 島	5位	専修大学	151
				3位	専修大学	152
				5位	金沢市立工業高校	153
				5位	高浜高校	154
31	第52回	平成9年	大 阪	5位	兼六中学校教	155
				5位	星稜高校	156
32	第53回	平成10年	神奈川	5位	兼六中学校教	157
				5位	専修大学	158
				3位	金沢市立工業高校	159
				5位	金沢市立工業高校	160
33	第54回	平成11年	熊 本	5位	兼六中学校教	161
				5位	陸上自衛隊金沢駐屯地	162
				5位	白山建設(株)	163
				5位	金沢市立工業高校	164
34	第55回	平成12年	富 山	5位	(有)ナンバーワン	165
				5位	七尾農業高校	166
				5位	金沢市立工業高校	167
				5位	金沢市立工業高校	168
35	第56回	平成13年	宮 城	5位	金沢北陵高校	169
				5位	金沢市立工業高校	170
36	第57回	平成14年	高 知	5位	金沢市立工業高校	171
				5位	金沢北陵高校	172
				5位	高浜高校	173
37	第58回	平成15年	静 岡	5位	(株)ボデーショップ米光	173
				5位	(有)ナンバーワン	174
				3位	金沢北陵高校	175
				5位	金沢市立工業高校	176
				5位	金沢市立工業高校	177
38	第59回	平成16年	埼 玉	5位	(株)ボデーショップ米光	179
				5位	(有)ナンバーワン	180
				3位	金沢市立工業高校	181
				5位	金沢市立工業高校	182
				5位	金沢市立工業高校	183
39	第60回	平成17年	岡 山	5位	桃山学院大学	183
				5位	金沢北陵高校	184
40	第61回	平成18年	兵 庫	3位	ダイワ通信(株)	185
				5位	金沢市立工業高校	186
41	第62回	平成19年	秋 田	3位	金沢市立工業高校	187
				5位	金沢市立工業高校	188
				5位	金沢北陵高校	189
42	第63回	平成20年	大 分	5位	金沢市立工業高校	190
				5位	金沢市立工業高校	191
				5位	金沢北陵高校	192
43	第64回	平成21年	新 潟	5位	金沢市立工業高校	193
				5位	金沢市立工業高校	194
44	第65回	平成22年	千 葉	3位	金沢市立工業高校	194
				5位	金沢市立工業高校	0
1	第66回	平成23年	山 口	5位	(株)エオネックス	195
				5位	星稜高校	196
2	第67回	平成24年	岐 阜	5位	森永乳業(株)	197
				5位	星稜高校	198
				3位	金沢西高校	199
3	第68回	平成25年	東 京	5位	森永乳業(株)	197
				5位	星稜高校	198
3	第69回	平成26年	長 崎	?	?	200
				?	?	200

☆ 国体入賞確立 ⇨ 90.0% (50回出場中45回入賞)

平成25年度
第48回全国高等学校体育連盟研究大会

開催要項

- 1 趣 旨 公益財団法人全国高等学校体育連盟に加盟する各高等学校体育・スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面の諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主 催 公益財団法人全国高等学校体育連盟
- 3 後 援 文部科学省 岐阜県教育委員会 岐阜県高等学校長協会
- 4 主 管 公益財団法人全国高等学校体育連盟研究部 岐阜県高等学校体育連盟
- 5 期 日 平成26年1月16日(木)・17日(金)
- 6 会 場 長良川国際会議場
〒502-0817 岐阜県岐阜市長良福光 2695-2
TEL 058-296-1200 FAX 058-296-1210
- 7 参加者 各都道府県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者及び高等学校の部活動に興味関心をもつ指導者・研究者・学生
- 8 大会主題 「輝き・感動！ 無限に広がるスポーツの力」
～ 部活動で育む たくましい心と体 ～
- 9 内 容 (1) 課題研究 (2) 分科会(競技力の向上、健康と安全、部活動の活性化)
(3) 講 演 講師：公益財団法人日本サッカー協会副会長 田嶋幸三 氏
演題：RESPECT－体育・スポーツ指導者が大切にしたいこと－
～JFA2005年宣言の推進～

10 日 程

時間 月 日	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1月15日(水)						①	②		
1月16日(木)		受付	開 会 式	全体会 (課題研究)	昼食	分科会 (競技力の向上、健康と安全、 部活動の活性化)			
1月17日(金)		受付	全体会 (講評)	全体会 (講演)	閉 会 式				

① 分科会発表者・助言者・司会者打合せ会

② 公益財団法人全国高等学校体育連盟研究部委員会

- 11 表 彰 分科会の研究発表の中から、優秀研究について表彰する。

12 分科会の発表申込

分科会の発表申込は、所定の用紙により各都道府県高体連を通じて申し込むこと。
課題研究の発表は別に定める。

- (1) 申込期限 平成25年8月16日(金) 必着
- (2) 申込先 〒502-0931
岐阜県岐阜市則武清水 1841-11
岐阜北高校内 岐阜県高等学校体育連盟事務局
第48回全国高等学校体育連盟研究大会岐阜県実行委員会会長 宛
TEL 058-231-7032・FAX 058-294-7990
E-mail : gifu-koutairen@movie.ocn.ne.jp
- (3) 原稿提出期限 平成25年9月20日(金) 必着
・原稿は別添の執筆要項に基づき、横書き(48字×42字)
6枚以内とする。
・補足資料提出がある場合は、700部を発表者が準備する。
- (4) その他 本大会では、ローテーションで決められた者と公募による者が
分科会発表を行う。

13 参加申込

参加申込は、所定の用紙に必要事項を記入の上、参加料を添えて各都道府県高体連で一括して申し込むこと。

- (1) 参加料 一人 4,000円
- (2) 申込期限 平成25年10月25日(金) 必着
- (3) 申込先 発表申込先に同じ
- (4) 参加料・報告書代 送金先
金融機関：十六銀行 忠節支店
口座番号：普通預金 1489794
名 義：第48回全国高体連研究大会 実行委員会
会 長 羽田野正史(ハノ マサシ)

14 宿泊・昼食の申込

宿泊・昼食の斡旋を希望する場合は、所定の用紙に必要事項を記入の上、各都道府県高体連で一括して申し込むこと。

- (1) 宿泊料 1人1泊(朝食付き、税・サービス料含む)
①岐阜都ホテル S:14,175円 T:9,450円 ②グレイブネットホテル岐阜 S:8,900円 T:8,400円
③ホテルリム岐阜 S:8,400円 T:7,350円 ④コンフォートホテル岐阜 S:8,000円 T:7,000円
⑤岐阜ワシントンホテルプラザ S:7,850円 T:7,650円 ⑥ホテルムクレト岐阜 S:7,500円 T:7,000円
⑦岐阜キャッスルイン S:7,000円 T:6,500円 ⑧サンホテル岐阜 S:6,000円 T:5,500円
- (2) 昼 食 1,000円(弁当・お茶 税込み)
- (3) 宿 泊 岐阜市内のホテル
- (4) 申込期限 平成25年10月25日(金) 必着
- (5) 申 込 先 (株)日本旅行 岐阜支店 担当：矢嶋・中島
〒500-8833 岐阜市神田町7-3-2 三富ビル2F
TEL 058-265-6311 FAX 058-265-7503
E-Mail : jun_yajima@nta.co.jp
- (6) 配 宿 11月末までに各都道府県高体連事務局宛に送付する。

15 報告書の購入予約

- (1) 報告書の購入希望者は、参加申込書の報告欄に部数を記入すること。
- (2) 申込期限 平成25年10月25日(金) 必着
- (3) 申込先 参加申込みに同じ
- (4) 報告書代送金先 参加申込みに同じ(1冊1,000円)

平成25年度「課題研究」発表者

県名	発表者	テーマ	所属校
愛知	ヤマウチ トシユキ 山内 俊幸	「運動部活動顧問を取り巻く現状と課題」 —東海4県の顧問対象意識調査から見えること—	愛知県立佐屋高等学校

平成25年度「活性化委員会からの報告と提言」発表者

全国高体連研究部 活性化委員長	ナカツカ ヨシミ 中塚 義実	活性化委員会からの報告と提言 —今後の「研究」と「実践」のために—	筑波大学附属高等学校
--------------------	-------------------	--------------------------------------	------------

平成25年度「分科会」発表者一覧

分科会テーマ	県名	発表者	テーマ	所属校
第1分科会 競技力の向上	岩手	オйкаワ ヌウキ 及川 雄輝	『水泳競技強化での体組成測定を活用』 ～InBody測定機を活用して～	岩手県立福岡高等学校
	宮城	ミウラ キミヒロ 三浦 公浩	『宮城県の高등학교運動部活動が置かれている環境と強化についての一考察』 ～アンケートから見える現状と課題～	宮城県仙台西高等学校
	埼玉	ヤマグチ ヌタカ 山口 裕	『体操競技(女子)の部活動とジュニアクラブの連携』	埼玉県立戸田翔陽高等学校
	三重	ヒグチ シロウ 樋口 士郎	『高校サッカーにおける競技力の向上(四中工サッカー部の取り組み)』 ～部活動で育むたくましい心と体～	三重県立四日市中央工業高等学校
第2分科会 健康と安全	神奈川	カワカミ トモカズ 川上 智一	『柔道専門部「安全対策」について』	神奈川県立横浜平沼高等学校
	長野	コイデ シンギキ 小出 茂樹	『高校生ラグビーフットボール競技者の安全対策意識について』	長野県伊那北高等学校
	静岡	ナンバ トシユキ 難波 利行	『富士山をフィールドにした冒険的な活動とその安全対策』	静岡県立富士宮西高等学校
	熊本	タニムラ ヒロアキ 谷村 弘章	『熊本県の運動部活動における健康・安全に関する一考察』	熊本県立水俣工業高等学校
第3分科会 部活動の活性化	富山	アラキ マサト 荒城 正人	『高校運動部活動活性化に向けた魅力の再発信』 ～中体連と高体連が連携して実施したアンケート調査結果から～	富山県立富山いずみ高等学校
	岐阜	タカハシ ヒデヒコ 高橋 英彦	『普及・育成・強化に関わる“何か”とは…』 ～岐阜県のフェンシング競技実態調査から～	岐阜県立大垣北高等学校
	奈良	イナガワ カズシ 稲川 和司	『「中堅のレベルアップ＝普及」による「競技力向上＝活性化」への取り組み』	奈良県帝塚山高等学校
	山口	カンダ ヒサテル 神田 久輝	『水球競技の普及と発展』	山口県立西京高等学校

第7回県研究大会参加者名簿

	学校名	氏名				
1	大 聖 寺	南 俊博				
2	加 賀	福田 昌美				
3	小 松 商 業	山作 直弘				
4	小 松 工 業	中谷 昌和	元尾 武彦	島屋 豊		
5	小 松 市 立	山本 伸忠	浅田 崇一			
6	小 松	吉田 洋	矢田 英	安田 誠二		
7	小 松 北	川本 喜央				
8	小 松 明 峰	野田 誠一				
9	寺 井	達 光洋				
10	鶴 来	谷本 佳代				
11	松 任	山口 賢一	片岡 信忠	西垣 仁志		
12	翠 星	北中 弘規	根石 修			
13	野々市 明 倫	平川 典生	加藤 欣央	山田 進	増田 誠也	
14	金 沢 錦 丘	角橋 茂則	瀬戸 博邦			
15	金 沢 泉 丘	青木 崇	正木 梨絵			
16	金 沢 二 水	金城 美咲	荒川 富夫			
17	金 沢 中 央	中川 太	門間 昭彦			
18	金 沢 伏 見	佐々木 明	千石 友規	今川 徹	山口 和人	
19	金 沢 辰 巳 丘	山下 理貴	田村 達	井波 真祐		
20	金 沢 商 業	齊藤 智之				
21	金 沢 工 業	中村 三成	平沢 謙輔			
22	金 沢 桜 丘	寺西 了	釜田 涉	松本 雅光	井村 和彦	
23	金 沢 工 業	水内 浩				
24	金 沢 西	勝二 国博	吉田 浩昭			
25	金 沢 北 陵	波佐間 英之	後川 徳人			
26	金 沢 向 陽	山首 一恵	中川 義之	車 浩明	杉本 彩子	
27	内 灘	守屋 英樹	福井 有澄	丸山 利晴		
28	津 幡	西村 剛	山本 智秀			
29	宝 達	至極 英代				
30	羽 咋	山岸 亜矢				
31	羽 松	蔵野 紀夫				
32	羽 咋 工 業	中越 顕治	北野 浩和	岩城 宏志	安達 祥光	
33	志 賀	倉脇 寛支				
34	鹿 西	本橋 克也				
35	七 尾 東 雲	松室 隆光				
36	七 尾	黒坂 昭弘	飯井 巧			
37	田 鶴 浜	池田 隆				
38	穴 水	小谷 貴博				
39	門 前	武田 航				
40	輪 島	小杉 央子				
41	能 登	大屋 省吾				
42	飯 田	獄 桂輔				
43	ろ う 学 校	中村 兼希				
44	明 和 特 支	高林 利幸				
45	いしかわ特支	小山 二郎				
46	金 大 付 属	藤田 久美子				
47	小 松 大 谷	西田 祥平	中村 隆輔	人見 雅樹		
48	北 陸 学 院	宮浦 淳一				
49	遊 学 館	中田 浩文				
50	金 沢	波佐間 美樹	塩野崎 寛	日吉 正		
51	尾 山 台	岡田 麻紀子				
52	星 稜	矢後 慎太郎	桜井 亮士	米田 光利		
53	金 沢 学 院	新田 雅士				
54	鵬 学 園	山口 宏治				
55	日 本 航 空	田辺 和文				

編集後記

今年も研究紀要を発刊でき、大変うれしく思います。

第7回を迎えた県の研究大会も、皆様のご協力のお陰で成功裏に終わり、ほっと胸をなで下ろしているところです。しかしながら、県高体連・高体連研究委員会としての課題もたくさん残っており、今後も一つずつ課題をクリアし、県高体連・高体連研究委員会が発展するとともに、先生方の指導力向上、生徒の競技力向上につながればと思っております。

また、今年度の全国研究大会岐阜大会では、研究委員会として課題研究発表を行う予定でしたが、諸事情により発表を辞退することになりました。大変残念ではありましたが、またの機会にと思っております。

この研究委員会の組織についてですが、今後の発展のために今年度より一部変更し、副委員長の役職を設け、各専門部からも委員としてメンバーに入りました。県の研究大会、研究紀要など委員会の活動、組織を盛り上げていけたらと思います。

最後になりましたが、関係各機関や調査研究委員の方々にこれまでのお礼と感謝を込めて、編集後記といたします。 (達 光洋 記)

平成25年度石川県高等学校体育連盟調査研究委員会名簿

	地区	氏名	学校名
部長	副会長	中嶋 敏一	寺井
委員長	副理事長	達 光洋	寺井
副委員長	加賀	元尾 武彦	小松工業
委員	金沢	波佐間 英之	金沢北陵
		千石 友規	金沢伏見
	能登	黒坂 昭弘	七尾
	専門部	山口 和人	金沢伏見
		守屋 英樹	内灘
		倉脇 寛支	志賀
		加藤 欣央	野々市明倫
		寺西 了	金沢桜丘
		中川 義之	金沢向陽
		櫻井 外郷	鶴来
田村 達	金沢辰巳丘		